

〔論 文〕

# 19世紀中期における無生物主語の lassen 使役構文

——話しことば性および書きことば性の観点から——

細 川 裕 史

## I はじめに

同じ時代、同じ地域で用いられている同一の言語であっても、文章として書かれることばと口頭で話されることばとの間には、統語構造や語彙などの点において相違がみられる。このうち、口頭発話において典型的な言語変種は、Koch/ Oesterreicher (1985) において「近い—遠いことば」モデル<sup>1)</sup>が提案されて以降、社会語用論的な視点から語史を研究するさいに注目されてきた。それは、それまでの語史研究が、書かれたことば、なかでもその規範となる標準語(が成立し普及する過程)をもっぱら対象としてきたからである。そのため、近年の社会語用論的な語史研究においては、推敲された文章や標準化された言語変種だけでなく、口頭発話や感情的で自然発生的(spontan)な言語変種にも関心がむけられている(vgl. Polenz 2000: 12f.; Burger 2005: 143)。

筆者は、細川(2020)では、トーマス・マンの作品を対象とした湯淺(2015a他)の成果に基づき、古典派作家の言語において、無生物主語の lassen 使役構文が一定数みられ、認知や状態変化の原因・理由を表す機能があることを指摘した。しかし、これらの成果は話しことば性の低い言語、文学作品における十分に推敲された言語のみを対象としている。その一方で、話しことば性の観点から興味深いのは、Zifonun u. a. (1997b)において、*machen*を用いた使役構文が、「めったに用いられない、文学的」(Zifonun u. a. 1997b: 1411)な表現とされている点である。このことから、湯淺(2015a他)および細川(2020)における lassen 使役構文に

関する指摘もまた、「文学的」なテキストにしか当てはまらない特殊なものである、と考えることもできる。そこで、本論文では、新聞の普及によってドイツ語圏に書きことば的な「標準語」が普及した19世紀中期を対象とし、先行研究で指摘された傾向がより話しことば性の高いテキストではどのようにみられるのかを、統計的調査を通じて考察する。

## II 無生物主語の lassen 使役構文

使役主および被使役主に関しては、「人—人以外」、「生物—無生物」、「個別化されている(individualisiert) —個別化されていない」、「具体的—抽象的」などのカテゴリーでより細かく区分することもできるが、本論文では、湯淺(2015a)にならい「人」と無生物とで分けた。先行研究においては、lassen 使役構文は、意思をもち他者の行動を制御できる「人」が使役主(および被使役主)であることがおもに想定されており、「人以外」や「無生物」は周道的に扱われている。また、使役構文の機能は、以下の基準で区分されている。

- 1) 直接性の程度:原因となる人(や出来事)と結果として行為を行う人(や引き起こされる出来事)が、時間的・空間的にどれほど密接に結びついているのか。
- 2) 制御の程度:使役主と被使役主のどちらがどれほど行為や出来事を制御しているのか。
- 3) 「使役(Kausation)」か「許容(Permission)」か:使役主の意思に基づいた行為を行わせているのか(「使役」),

被使役主の意思に基づいた行為を行わせているのか(「許可」)。

たとえば、井出(2013)においては、「人」主語のlassen使役構文は、使役主と被使役主とが意思を持つ場合には、「要求(Auffordern)」と「許可(Zulassen)」に分類され、使役主の意思のほうが強ければ「要求」、被使役主の意思のほうが強ければ「許可」を表す。これらの行為は、被使役主によって行われるため、直接性はそれほど高くない。一方で、被使役主が意思を持たない無生物の場合、lassenとともに用いられる動詞が継続を表していれば「放置(Lassen)」表していなければ「惹起(Zustandbringen)」となる。「惹起」の場合、行為そのものに使役主が介入する必要があるため、直接性が高いといえる(vgl. Ide 1996: 42, 47f.; Zifonun u. a. 1997a: 705f.; 井出2013: 101ff.; Behr 2021: 25f., 128ff.)。

本論で扱う19世紀に関していえば、細川(2020)で指摘したように、19世紀において広く読まれていた文法書では、lassenは「可能性(Möglichkeit)」と「必要性(Nothwendigkeit)」を表す助動詞として扱われており、意思をもつ「人」が使役主であることが前提となっている。そして、被使役主にとって「可能」であれば「許可(Zulassung)」を表し、被使役主にとって「必要」であれば「命令(Befehl)」あるいは「指示(Anordnung)」を表すもの、とみなされている。無生物主語のlassen使役構文が触れられていない点に関しては、先行研究において、中高ドイツ語のlâzenにもすでに無生物主語を伴う使役構文がみられたが、きわめて稀な例であったという指摘がある。そのため、19世紀においても無生物主語のlassen使役構文の使用頻度は限定的で、周辺的なものと思われていたために文法書にとりあげられなかったとも考えられる(vgl. Heyse 1838: 664; Becker 1852: 85; Ide 1996: 188f.; 細川2020: 34f.)。

意思をもたない無生物が主語のlassen使役構文は、もっぱら、使役主が比較的直接的に介入して引き起こされる行為や出来事の「原因(Ursache)」を表すものとされてきた<sup>2)</sup>。これ

は、上述の「人」主語を伴う「惹起」から派生したカテゴリーといえる。また、Koo(1997)が指摘した、使役主がみずからの引き起こす行為や出来事を制御していないタイプの2カテゴリーには、無生物主語の使役構文を含めることができる。それは、使役主も被使役主も行為や出来事を制御していない「原因(Kausation der Ursache)」と、被使役主が行為や出来事を制御している「動機(Motivative Kausation)」である。前者の場合は、wegen(～のせいで)やvor(～のあまり)などを用いて言い換えが可能であり、後者の場合は、aufgrund(～のために)を用いて言い換えが可能である(vgl. Ide 1996: 44ff.; Koo 1997: 154ff.)。

その一方で、湯淺(2015a他)は、マンの『ファウスト博士』(1947)を調査し、無生物主語を伴うものがlassen使役構文全体の4分の1以上をも占めること、また、それらの例においては認知や状態変化の「原因・理由」が表されていることを明らかにした。そして、『使役』を内包するすべての表現を、『人』主語使役構文からの拡張と見ることには少なからず疑問が(湯淺2018: 4)残り、「無生物主語lassen使役構文には、『人』主語の場合とは全く別の意味構造を想定する必要がある」(湯淺2016: 65)と主張している。また、細川(2020)で考察した古典派作家の言語においても、無生物主語を伴うものが、全体の約13～22%を占めていた(vgl. 湯淺2015a: 9f.; 湯淺2018: 3f.; 細川2020: 40)。この、無生物主語のlassen使役構文がおもに認知の原因・理由を表していることを指摘した湯淺(2015a他)との関連でとくに興味深いのは、Behr(2021)において提案された「認識(Erkennen lassen)」というカテゴリーである。このカテゴリーに含まれる使役構文は、認識動詞(wissen, vermuten usw.)や知覚動詞(hören, wahrnehmen usw.)、心理動詞(fürchten, vermischen usw.)を伴い、「人」または無生物である使役主によって被使役主の認識が変化することを表す(vgl. Behr 2021: 143ff., 176ff., 182ff.)。

そこで、本論文では、湯淺 (2015a 他) および細川 (2020) との比較をおこなうために、認識の変化を重視した Behr (2021) に基づき、無生物主語の lassen 使役構文を以下の 3 カテゴリーに分類する。すべてのカテゴリーに共通するのは、無生物である使役主によって直接的あるいは間接的に引き起こされる行為や状態を表している点である。

- 1) 「原因」: 被使役主が「人」または無生物で、被使役主には制御されていない行動あるいは状態の変化 (ただし、認識の変化をのぞく) を表すもの。
- 2) 「動機」: 被使役主である「人」によって制御されている行動を表すもの。
- 3) 「認識」: 被使役主である「人」の行動のうち、認識の変化を表すもの。

### Ⅲ 19世紀中期における無生物主語のlassen使役構文

#### 1. 話しことば性とコーパス

19世紀のドイツ語圏に関していえば、身近な相手との対面コミュニケーションで自然発生的に用いられる地域方言的な日常語と、前もって推敲され公の場で不特定の相手に用いられる「標準語 (Hochsprache)」を、「近さ」と「遠さ」の極としてみることができるだろう。1800年ごろに登場した比較的統一的な「標準語」は、19世紀を通じて、おもに貴族や教養市民といった上層階級が使用する特権的な言語変種であったが、1830年代以降、安価な新聞が普及して大衆的な読み物となったことで、幅広い社会層にも広まっていった (vgl. Engelsing 1966: 29; Eggers 1977: 129; Schmidt 1996: 133f.)。

本論文では、話しことば性の違いを考慮して、以下の3つのカテゴリーからサンプルを抽出した。まず、細川 (2020) で扱った古典派作家の言語である (サンプル K)。これらの言語は、十分に執筆時間をとって空間を共有していない不特定多数の読者に向けて書かれたものであり、また、19世紀においては「標準語」の規範と

みなされ、ゲーテやシラーの作品における用例が文法書でも重視されていたという点からみても、書きことば性が高いといえる<sup>3)</sup>。つぎに、日常的な書きことばとして、19世紀中期における新聞の報道文を選んだ (サンプル Z)。新聞にはさまざまな記事が掲載されているためその話しことば性には差があるが、報道文では基本的に主観的なコメントは排除されており、私的な範囲を超えた大勢の読者に向けて書かれているため、書きことば性は高い。ただし、新聞記者は執筆時間に厳しい制約を受けており、自然発生的に言語を生産する必要に迫られており、また、新聞の言語以外にはほぼ日常語にしか接していなかった読者にも理解できるように執筆する必要があった。これらの点からは、古典派作家の言語よりは話しことば性が高いと考えられる。そして、もっとも話しことば性の高いテキストとして選んだのは、19世紀中期の戯曲である (サンプル D)。「近いことば」の典型例は対面コミュニケーションにおける口頭発話であるが、録音機器が普及する以前の歴史上の会話は、文章化されたものを対象に研究するしかない。たしかに、文学作品における会話は、作者が事前に十分な執筆時間をとって推敲した言語ではあるが、しかし、そこで使用されているのは執筆当時の観客にとって自然な会話に聞こえる言葉遣い、すなわち日常語的な変種であったと考えられる。そのため、本論文では、ほぼ会話文で構成される戯曲を当時の日常会話の代わりに考察した (vgl. Hildebrand 1930: 114f.; Kilian 2005: 43ff.; Hosokawa 2014: 29ff., 49f., Kap. 3; 細川 2020: 35f.)。

表1 コーパス

	内容	分量
K	<i>Wilhelm Meisters Lehrjahre</i> 他, ゲーテとシラーの小説, 自伝, 歴史書計 4 作品	194,652 語
Z	<i>Correspondenzblatt und Kieler Tageblatt</i> 他, 1850/51 年の新聞計 6 紙における報道文	129,571 語
D	<i>Leonce und Lena</i> 他, 1836-54 年の戯曲計 7 作品	123,192 語

## 2. コーパスにおけるlassen使役構文

用例数に関しては、主語と文末不定詞が明示されているlassen使役構文のうち、lassenではなく文末不定詞の数を算出した。したがって、例(1)では*verhaften*と*verfolgen*、例(2)では*kochen*と*braten*の2つの文末不定詞があるため、用例数に関してはそれぞれ2例として算出している。

- 1) [...] denn der mittlerweile in das Königreich zurückgekommene Ferdinand VII. [...] ließ deren vornehmste Anhänger *verhaften* und *verfolgen*. (IZ 11.1.1851: 4 というのも、その間に王国に帰還したフェルナンド7世は、そのもっとも重要な支持者を逮捕させたり迫害させたりしたからである。強調筆者。以下同様)<sup>4)</sup>
- 2) Die Fürstin läßt allzu gut *kochen* und *braten* für euch Spitzbuben. (HS: 8 奥方様は、おまえらみたいなゴロツキにはもったいないくらい、たいそうに煮させたり焼かせたりしていなさる)

細川(2020)と同様に、*es an etwas fehlen lassen*(欠ける)や*sich etwas gefallen lassen*(甘受する)、*jn. gewähren lassen*(好きなようにさせる)などの慣用表現も統計に含めている<sup>5)</sup>。なお、サンプルZに含まれる「ドレスデンにおける会合(Dresdner Konferenzen)」に関する記事で、無生物主語のlassen使役構文をふくむ会合出席者の発言が異なる2紙に直接引用されていたが、これらは1例として扱った。

- 3) Diese Erfahrungen haben aber auch zugleich die Mängel erkennen lassen. [...]. (FZ 3.1.1851: 1; IZ 4.1.1851: 2 しかし、これらの経験は同時に、以下のことが欠如していることも認識させました)

表2 lassen使役構文の使用頻度

(1,000語あたり)

	分量	用例数	使用頻度
K	194,652語	232例	1.19回
Z	129,571語	94例	0.73回
D	123,192語	114例 <sup>6)</sup>	0.93回

各サンプルにおけるlassen使役構文の使用頻度を、表2に示した。サンプルKおよびDでは1,000語に約1回、Zではやや少なく0.7回使用されていた。興味深いことに、書きことばの規範とされたテキストでも、会話文で構成された話しことば性が高いテキストでも、lassen使役構文は頻繁にみられた。サンプルZでの使用頻度が比較的低い理由については、lassen使役構文や話しことば性の特徴ではなく、客観的事実のみを伝えようとする報道文の一般的な特徴、さらには、当時の新聞報道にはまだ検閲があったため「誰がそうさせたのか」という因果関係を表現しなかったためだろう(vgl. Burger 2005: 213f.; Hosokawa 2014: 84f.)。比較対象として、現代ドイツ語におけるlassenの使用例を文字メディアと音声メディアから1,000例ずつ抽出し、その形式と機能を分類したBehr(2021)における数値をあげておく。同論文によれば、文字メディアから抽出したサンプルでは全体の60.8%が使役構文だったのに対し、音声メディアからのサンプルでは51.3%であった。考察対象も算出方法も異なるので単純な比較はできないが、現代語では、lassen使役構文は書きことば性の高いテキストに若干多くみられるといえるかもしれない(vgl. Behr 2021: 63ff.)<sup>7)</sup>。

表3 「人」主語のlassen使役構文の使用頻度

(1,000語あたり)

	分量	用例数	使用頻度
K	194,652語	196例	1.01回
Z	129,571語	83例	0.64回
D	123,192語	108例	0.88回

コーパスにみられた lassen 使役構文のうち、「人」主語を伴うものの使用頻度を表3にまとめた。「人」主語として算出したのは、代名詞(例4)、人物名(例5)、人間を表す名詞(例6)、身分や立場を表す名詞(例7)、形容詞の名詞化(例8)などである。また、細川(2020)では抽象的「概念」として扱った集団・組織名(例9、10)も、今回の調査では「人」主語として算出した。こうした例は、いずれのサンプルにも豊富にみられ、そもそも lassen 使役構文自体が少ないサンプルZのみ「人」主語の例も少ない、という結果がでた。

- 4) [...] ich ließ gleich wieder neue Kleider dazu machen. (WM: 21 僕は, すぐにまたそのための新しい服を作らせた)
- 5) Dr. P. W. Forchhammer, Professor der Universität in Kiel, hat eine werthvolle [...] Beschreibung der Ebene von Troja bei L. Brønner in Frankfurt drucken lassen [...]. (IZ 11.1.1851: 10 キール大学教授の P. W. フォルヒハマー博士は、トロイ平野に関する貴重な記述をフランクフルトのL. プレンナーのところ印刷させた)
- 6) Dieser Mann [...] hatte zu Regensburg den Notarius Aprill [...] die Treppe hinunter geworfen oder werfen lassen. (DW: 194 この男は、レーゲンスブルクで公証人のアプリルを階段から突き落としたとか、突き落とさせたとか)
- 7) Der Kapitän nimmt das arme Weib ins Geheim an Bord, während er die Rivalin ausschiffen läßt [...]. (WZ 4.1.1851: 1 船長は、ライバルの女を下船させる一方で、その哀れな女性をひそかに乗船させた)
- 8) [...] daß der Alte [...] jeden, der außer Ihnen mit dem Gewehre in den Forst kommt, als einen Wilddieb behandeln lassen will. (EF: 55 あの老人が、あな

た以外の銃を持って所有森に入る全員を密猟者として扱わせようとすることは)

- 9) Die Regierung und das Ministerium haben es jedoch dabei bewenden lassen, daß [...]. (DR 2.1.1850 Abd: 1 しかし、その際、政府と省庁は以下のことだけにとどめた)
- 10) Unser Wahlcomité läßt Ihnen sagen, [...]. (JR: 21 我々の選挙員会はあなたに以下のことを伝えさせます)

なお、不定代名詞 *man* を主語とする lassen 使役構文も「人」主語として算出している。このような例は、細川(2020)で指摘したように、サンプルKでは lassen 使役構文全体の10.8%をも占めており使用頻度がとても高いが(例11)、厳密には、意思を持つ特定の「人」を表す主語とは区別すべきだろう(vgl. Behr 2021: 25f.)。不定代名詞 *man* を主語とするものが全体に占める割合は、サンプルZでは8.5%(用例12)、サンプルDでは5.3%であり、わずかな差ではあるが、*man* 主語の構文は話しことば性の低い用法だといえるかもしれない。

- 11) Man hatte mich zwischen zwei Weibspersonen sitzen lassen, [...]. (VE: 24 ひとは俺を2人の女性のあいだに座らせた)
- 12) [...] daß man falsche Münzen in Altona schlagen lasse, [...]. (KC 11.1.1850: 1 ひとがアルトナで貨幣を偽造させていることは)

### 3. コーパスにおける無生物主語の lassen 使役構文

#### 3.1. 使用頻度と割合

無生物主語として算出したのは、具体的な「物」および「出来事」、そして抽象的な「概念」を表す名詞である。「物」主語としては以下のようなものがあつたが、後述する「出来事」や「概

念」に比べれば、その用例は少ない。

- 13) [...] als die aufgebundene Serviette einen verworrenen Haufen spannenlanger Puppen sehen ließ. (WM: 12 ほどかれたナプキンが, 手のひらサイズの人形のゴチャゴチャしたかたまりを見せたとき)
- 14) Bücher [...], die einen gefährlichen Zusammenhang mit Rheinsberg voraussetzen lassen – (ZS: 26 ラインスベルクとの危険な関係を予期させる本)

「出来事」を表す主語には、例(16)の“Gustav Adolph”や例(17)の“Hohenlohe”のように、いわば本来の使役主である特定の人物が所有格の形で明示されているケースが頻繁にみられる。これらは、lassen使役構文の特徴ではなく、名詞文体によって複文を避け、一文中なるべく情報を詰め込もうとする「圧縮報道文体」(Straßner 1999: 37)の特徴といえるだろう。つまり、dass文などの従属文で特定の人物の行動を表すのではなく、その行動を主文における無生物主語で表現することで、同一の内容を単文で表そうとしているのである(vgl. 細川 2020: 41)。

- 15) Welch einen dornenvollen und langen Umweg hat uns die unerforschliche Geschichte machen lassen, [...]. (IZ 11.1.1851: 2 この理解しがたい出来事は, 私たちに, なんと苦難にみちた長い回り道をさせたことだろうか)
- 16) [...] bald ließ ihn Gustav Adolphs reißender Siegeslauf ein Vorgefühl desselben genießen. (GD: 116 まもなく, グスタフ・アドルフの快進撃が, 彼にその予感を享受させた)
- 17) [...] wie die Ankunft Hohenlohes in Wien vermuthen läßt. (DR 1.1.1850

Mor.: 2 ホーエンローエのウィーンへの到着が想像させるように)

抽象的な「概念」としては、以下のようなものがあった。このカテゴリーにおいても「出来事」と同様に、例(19)の“Protestanten”のように、使役主としての「人」が明示されている例がみられる。例(20)は対面コミュニケーションにおける発話であり報道文体とはみなせないが、使役主として“du”が明示されている点では、上述の例(16)や例(17)などと同様である。

- 18) Mehrseitige Gründe lassen es demnach dringend wünschen, daß [...]. (KC 5.1.1850: 2 それゆえ, さまざまな理由が, 以下のことを切に望ませる)
- 19) Die Lüsterheit der Protestanten nach den geistlichen Gütern ließ sie keine Schonung [...] erwarten. (GD: 17f. プロテスタントたちの教会領に対する貪欲さは彼らに手心を期待させなかった)
- 20) Mich wundert nur, daß deine Milde das nicht längst geschehen ließ. (HS: 12 あなたの寛大さが, そのことをとっくに行わせていないことが, 私には不思議でなりません)

表4 無生物主語のlassen使役構文の使用頻度 (1,000語あたり)

	分量	用例数	使用頻度
K	194,652語	36例	0.18回
Z	129,571語	11例	0.08回
D	123,192語	6例	0.05回

各サンプルにおける無生物主語のlassen使役構文の使用頻度を、表4に示した。とくに興味深いのは、話しことば性の高いサンプルDには、無生物主語の例がほとんどみられない、という点である。サンプルZにおける使用頻度も

低い、上述のようにこのサンプルにおいてはlassen使役構文そのもの使用頻度が、他の2サンプルよりも少なかった。その一方で、サンプルDは、全体ではサンプルKに次ぐ使用頻度だったにもかかわらず、無生物主語の使用例はきわめて少ないのである。

表5 lassen使役構文における無生物主語の割合

	総数	無生物	%
K	232例	36例	15.5%
Z	94例	11例	11.7%
D	114例	6例	5.3%

表5は、lassen使役構文全体における無生物主語の割合を表している。書きことば性の高い両サンプルでは、全体の約7分の1(K)から9分の1(Z)が無生物主語であったのに対し、話しことば性の高いサンプルDでは、約20分の1にすぎない。この割合について、先行研究のデータと比較すると、湯浅(2015a)では全体の27%が無生物主語、また、算出方法が異なるためあくまでも参考値にすぎないが、Eguchi(1997)における現代の新聞では33%であった(vgl. 湯浅2015a:7; Eguchi 1997: 158f., 164)<sup>8)</sup>。たしかに、これらの研究と比べると、いずれのサンプルにおいても無生物主語の割合は低い。しかし、書きことば性の高い両サンプルに関してはいずれも10%以上を占めているため、19世紀中期における無生物主語のlassen使役構文を、「稀にしかみられない周延的な用法」とみなすことはできないように思われる。

### 3. 2. 「原因」

「原因」として分類された用例の割合を表6に示した。割合だけみればサンプルDにおける割合が突出しているが、これは母数が小さく、また後述するように明らかに擬人法が用いられた2例を含んでいるためである(例22および23)。サンプルDをのぞけば、「原因」が全体に占める割合は、3分の1から2分の1弱である。比較対象としてBehr(2021)をあげる

と、文字メディアでは調査した1,000例のうち12.01%が、音声メディアでは1.56%が「原因」に分類されており、しかも音声メディアにみられたわずか8例はいずれも公的な領域、すなわち、書きことば性が比較の高い文脈で用いられたものであった(vgl. Behr 2021: 155, 176ff.)。

表6 無生物主語のlassen使役構文における「原因」の割合

	無生物主語の構文	「原因」	%
K	36例	12例	33.3%
Z	11例	5例	45.5%
D	6例	5例	83.3%

湯浅(2016)は、無生物主語のlassen使役構文の形式としては、無生物の対格目的語と自動詞(不定詞)をとるものが全体の約3分の1をも占めており、もっとも頻繁にみられると指摘している。このような被使役主も無生物であるケースでは、多くの場合、主語が状態や変化を生起させる「原因・理由」を表している。また、Behr(2021)においても、「原因」に分類された用例の7割以上が自動詞とともに用いられている。そして、そのうち被使役主が「人」であるものが全体の約48%であるのに対し、抽象的な無生物が約37%、具体的な無生物が15%を占めており、わずかな差ではあるが被使役主も無生物のケースの方が多い(vgl. 湯浅2016:71ff.; Behr 2021: 178f.)。

しかし、本コーパスでは、無生物主語のlassen使役構文が無生物の目的語をとるという例はとても少ない。被使役主も無生物である例としては、以下のようなものがあつた。

21) [...] die wachsame Eifersucht beider Könige und unvermeidliche Handlungscollisionen in den nordischen Meeren ließen die Quelle des Streits nie versiegen. (GD: 82 両国王の油断のない妬み心と北方の海域における避けがたい商業的対立とが、紛争の火種

を決して絶やさせなかった)

- 22) Der arme Herr Hofprediger! Sein Frack lässt den Schweif ganz melancholisch hängen. (LL: 72 かわいそうな宮廷説教師殿! 彼の燕尾服は、とてもメランコリックに裾をぶら下げさせているよ)
- 23) Eben wollt ich gehen, da ließ der alte, vernünftige Baum eine saftige Birne zu meinen Füßen niederfallen, als wollt er sagen: die ist für den Durst, und weil du mich durch den Vergleich mit deinem Schlingel verschimpft hast! (MM: 49 ちょうど行こうとしたとき、あの年をとって聞き分けの良さそうな木が、わしの足元にみずみずしいナシを落ちさせたのよ、「これで渴きを癒すがよい、おまえのダメ息子と同じだなどとバカにしてくれたがの」とでも言いたげにな)

例(21)はまさに湯浅(2016)に典型的にみられたケースといえるが、例(22)は宮廷説教師の着ている燕尾服を擬人化している、あるいは着ている服によって人物自体を表している提喩とみなすべきだろう。また、例(23)は、その後の発話内容から考えて、明らかに擬人法の一例である。例(22)や(23)のような例は、無生物主語ではあるが、その機能に関しては「人」主語のlassen使役構文として扱う必要があるだろう(vgl. Ide 1996: 182ff.)。

「原因」を表す用例のなかでとりわけ興味深いのは、被使役主が「人」であり、その「人」自身に「内在する心的生理的作用・状態」(湯浅2016: 68)が使役主であるケースである。こうした組み合わせにおいては、被使役主には制御できない行為を表しているものがみられる。上述したように、無生物主語のlassen使役構文のうち、「出来事」や「概念」を表す主語には、しばしば特定の人物を主語にして言い換えられる例がある。しかし、被使役主自身に内在し、し

かも被使役主には制御できない「原因」が主語の場合、それを他の「人」で言い換えることはできない。言い換えると、このような意味をもつ使役構文は無生物主語でしか表せないのである。そのため、このタイプの使役構文は、『使役』を内包するすべての表現を、『人』主語使役構文からの拡張と見ることには少なからず疑問が」(湯浅2018: 4)あるという主張を裏づけるものといえるだろう。たとえば、例(24)では、“Beschämung”などが被使役主である“ich”にみっともない格好をさせていることが表されているが、使役主は“ich”自身に内在するものであり、かつ“ich”には制御できないものであるため、“ich”を用いた「人」主語の文で同じ内容を表すことはできない。また、例(25)では、“Begeisterung”が被使役主である“Mensch”に「パンが必要だということ」を忘れさせるという内容が表されているが、これも同様に、“Mensch”がみずから制御して熱狂したり忘れてしているわけではないため、“er”を主語として書き換えることはできない。こうした例は、表7に示したように、用例の数自体は少ないが、サンプルKでは無生物主語のlassen使役構文全体の3分の1を占めている。その他のサンプルでは、「原因」に分類される用例自体が少なかつたため判断が難しいが、このタイプの構文は言い換えが不可能であるという点からみれば、話しことば性とは無関係に使用される可能性が考えられる。

- 24) Die Beschämung, der Frostschauer, das Bestreben, mich einigermaßen zu bedecken, ließen mich eine höchst erbärmliche Figur spielen; [...]. (DW: 67 [[「ぼく」が感じていた] 恥ずかしさや寒さ、少しでも身を隠そうという努力が、ぼくにみっともない格好をさせた)
- 25) Das ist der Mensch: er hat Augenblicke der Begeisterung, die ihn vergessen läßt, daß er Brod braucht;



[...]. (ML 16.1.1851: 4 これこそが人間なのである。人間には熱中するときがあり、それは、みずからにはパンが必要なのだということを忘れさせてしまうほどである)

表7 使役主が「内在する心的生理的作用・状態」である「原因」の割合

	「原因」	心的生理的作用・状態	%
K	12例	4例	33.3%
Z	5例	1例	20%
D	5例	0例	0%

### 3. 3. 「動機」

被使役主が「人」の用例の多くは、後述する「認識」に分類されるタイプであり、また、「認識」以外では、表7で示したように、被使役主には制御できない行為を表す「原因」がしばしばみられた。本コーパスにおいては、被使役主も「人」であり、かつ「認識」には分類できないという例は、サンプルKにおける例(26)しかみられなかった。したがって、今回の調査に限っていえば、「動機」は書きことばの規範とされる言語にしかみられない稀な用法、とみなすことができる。

26) Mein Vorurteil, daß er es doch verstehen müsse, ließ ihn gewähren [...]. (DW: 115 彼も分かってくれるに違いないという私の思い込みが、彼に好きなようにさせた)

### 3. 4. 「認識」

用例数がきわめて少ないサンプルDを除けば、無生物主語のlassen使役構文としてもっとも頻繁にみられたのは、「認識」に分類されるものである。認識動詞としては例(3)の *erkennen* や例(27)および例(28)の *vermuthen*、知覚動詞としては例(13)の *sehen* や例(29)の *überschauen*、心理動詞としては例(18)の *wünschen* や例(30)の *vermissen* などがみられ

た<sup>9)</sup>。Behr (2021)では、このカテゴリーにみられる動詞の約70%が認識動詞であったが、本コーパスにおいては使用される動詞の種類は多様であり、比較的使用頻度の高い動詞としては *sehen* (5回)、*vermuthen* および *erwarten* (4回) などがある (vgl. Behr 2021: 183)<sup>10)</sup>。

- 27) Umstände, die einen gehässigen Inhalt vermuthen lassen sollten. (FZ 3.1.1851: 1 悪意に満ちた内容を想像させたであろう状況)
- 28) Eine Stelle, die ich wohl mehr als zehnmal überlesen habe, läßt mich vermuthen, [...]. (ZS: 14 私が10回以上も目を通した[手紙の]一節は、私にこう思わせるのです)
- 29) Sie [die Ordnung] läßt uns jederzeit das Ganze überschauen, [...]. (WM: 35 それ[秩序]はどんな時だって、ぼくたちに全体を見渡させてくれるんだぞ)
- 30) [...] was [...] manchen liebgewordenen Schillerschen Beitrag, z. B. den Pfortnergesang, schmerzlich vermissen ließ. (ML 29.1.1851: 4 たとえば門番の歌など、人気になっていたシラーの功績のいくつかをひどく恋しがらせたこと)

表8 無生物主語のlassen使役構文における「認識」の割合

	無生物主語の構文	「認識」	%
K	36例	23例	63.9%
Z	11例	6例	54.5%
D	6例	1例	16.7%

「認識」の用例は、表8にあげたように、サンプルDでは1例(例28)しかみられず、その一方で、書きことば性の高い両サンプルでは全体の半数以上を占めている。Behr (2021)の分類は「人」主語のものを含んでいるため、単純

な比較はできないが、文字メディアでは調査した1,000例のうち6.74%が、音声メディアでは1.17%が「認識」に分類されており、話しことばにはきわめて稀にしかみられないと結論づけられている (vgl. Behr 2021: 155, 182ff.)<sup>11)</sup>。この指摘は、本コーパスの傾向とも重なる。

#### IV おわりに

無生物主語のlassen使役構文は、Behr (2021) が扱った現代ドイツ語と同様に、19世紀中期においても話しことば性の高いテキストには稀にしかみられず、書きことば性と結びついた表現だったということが明らかになった。当時、書きことばの規範とされた古典派作家の言語だけでなく、日常的に読まれていた書きことばである新聞の言語においても、無生物主語を伴うものがlassen使役構文の一定数を占めていた。しかし、湯浅 (2016) や Behr (2021) における用例とは異なり被使役主も無生物という用例は少なく、被使役主は「人」であり、その「人」が無生物主語によって認識を変化させられるタイプの用例（「認識」）がもっとも多くみられた。これは、現代ドイツ語においても、書きことば性の高いテキストにみられる表現である。

一方で、湯浅 (2016) が指摘した「『人』主語の場合とは全く別の意味構造」に関しては、「人」主語では言い換えられない以下のような例が、本コーパスにもみられた。それは、被使役主自身に内在する心理的要素が無生物主語となっており、被使役主には制御できない行為や状態の変化を表しているケースである。このような無生物主語ならではの表現は、代替が利かないためテキストの話しことば性とは無関係に使用される可能性がある。しかし、今回調査した話しことば性の高いサンプルでは、無生物主語全体でも6例しかなかったこともあり1例もみられなかった。また、日常的な書きことばである新聞から抽出したサンプルでも1例しか確認されていない。本研究に基づけば、湯浅 (2016) で指摘された「全く別の意味構造」は、19世紀中期

においては、書きことばの規範とみなされるほど書きことば性の高いテキストにしかみられない、きわめて特殊な用例ということになる。

無生物主語のlassen使役構文や、とりわけその話しことば性については先行研究が限られているため、本論文では統計的に得られたデータを別のコーパスから得られたデータと比較し多角的に検討することがほとんどできなかった。しかし、たとえば、別の時代のテキストから話しことば的・書きことば的なサンプルを抽出してコーパスを作成することで、通時的な考察をおこなうことが可能になる。そのような観点からは、今回の調査とは異なる結論が得られるかもしれない。このような通時的な研究を、今後の課題としたい。

#### 注

- 1) Koch/ Oesterreicher (1985 u. a.) の「近い—遠いことば」モデルでは、コンセプトとしての話しことばと書きことばは、「近いことば」と「遠いことば」を両極とするスケール上にあるとされ、「近いことば」の極に近ければ「コンセプトとして話しことば性が高い」、「遠いことば」の極に近ければ「コンセプトとして書きことば性が高い」とみなされる。Schwitalla (2006) は、この「近さ」と「遠さ」を以下のようにまとめている。「近い」コミュニケーションとは、コミュニケーション相手が間近にあり、両者の親密さから感情の発露や自然発生的な言語使用が許され、空間を共有しており対象物を指し示すことができるようなコミュニケーションである。一方、「遠い」コミュニケーションとは、コミュニケーションの参加者が時間的・空間的に隔絶されている場合（手紙や電話）や、参加者同士に面識がない場合、テーマや目標があらかじめ設定されている場合、公の場で行われる場合のコミュニケーションなどである。このように、両者の違いは、時間的・空間的な距離だけでなく、言語使用者同士の心理的距離、私的か公的かの違いなども含んでいる (vgl. Koch/ Oesterreicher 1994: 587ff.; Schwitalla 2006: 21f.)。
- 2) 「非意図的使役 (Nichtintentional faktitive Kausation)」とも呼ばれる (vgl. Gunkel 2003: 242ff.; Behr 2021: 148)。
- 3) サンプルKは、回想された現実の会話や虚構世界の会話も含んでいる。それらの文では、より話しことば性が高くなる (vgl. Kilian 2005: 38ff.)。

Mar. 2024

19世紀中期における無生物主語のlassen使役構文

- 4) 和訳に関しては、可能なかぎり使役関係が明確になるように、筆者が訳をつけた。そのため、日本語としては不自然なものもある。また、文学作品のサンプルはデジタル・データから作成しているが、引用にさいしては、該当箇所が分かりやすいよう書籍におけるページ数を挙げています。
- 5) なお、Behr (2021)によれば、調査対象となった現代ドイツ語のlassenを含む構文のうち、約8%が慣用的な表現であった (vgl. Behr 2021: 64, 68f.)。
- 6) ト書きでの使用例が2例あったが、いずれも本論文の中心テーマではない「人」主語の使役構文であり、また、会話文とそのほかの文を区別していない他のサンプルと条件を合わせるため、除外していない。
- 7) Behr (2021)は、命令文における使役構文を、「要求構文」という別項目に分類している。その割合は、文字メディアでは全体の1.3%、音声メディアでは6.9%であった。この項目では話しことばの方が使用頻度が高いが、これはlassen構文の特徴ではなく、命令文自体の使用頻度の差が反映されたものといえるだろう。
- 8) Eguchi (1997)における「グループK」(再帰代名詞を含まない文)における割合であり、lassen使役構文全体の割合ではない。Eguchi (1997)はlassenが含まれる「文」の数を算出しており、また、使役構文と受動構文の区分が湯淺 (2015a他)や本論文とは異なる。
- 9) このうちvermissenは、被使役主が制御している行為とは思えないが、Behr (2021)の分類にしたがった (vgl. Behr 2021: 183)。
- 10) 3つのサンプルすべてで用いられているのはvermuthenしかなく、また、最頻出のsehenはゲーテの作品にしか現れない。
- 11) 「認識」に分類された用例全体の約43%が「人」主語、約13%が具体的な無生物主語、約44%が抽象的な無生物主語であった (vgl. Behr 2021: 183)。

### 一次文献

サンプルK

- Goethe, Jonann Wolfgang (2012 [1811-1833]): *Dichtung und Wahrheit*. Stuttgart. (=DW. <https://www.projekt-gutenberg.org/goethe/dichwahl1/dichwahl1.html> [Stand: 18.3.2020])
- Goethe, Jonann Wolfgang (2019 [1795]): *Wilhelm Meisters Lehrjahre*. Stuttgart. (=WM. <https://www.projekt-gutenberg.org/goethe/meisterl/meisterl.html> [Stand: 18.3.2020])
- Schiller, Friedrich (2003 [1786]): *Der Verbrecher aus verlorener Ehre und andere Erzählung*. Stuttgart. S. 5-33. (=VE. <https://www.projekt-gutenberg.org/schiller/verbrech/verbrech.html> [Stand: 24.2.2020])

[gutenberg.org/schiller/verbrech/verbrech.html](https://www.projekt-gutenberg.org/schiller/verbrech/verbrech.html) [Stand: 24.2.2020])

Schiller, Friedrich (2016 [1792]): *Die Geschichte des Dreißigjährigen Krieges*. North Charleston. (=GD. <https://www.projekt-gutenberg.org/schiller/30jkrieg/30jkrieg.html> [Stand: 24.2.2020])

サンプルZ

*Correspondenzblatt und Kieler Tageblatt*. Kiel. 1. bis 15.1.1850. (=KC)

*Deutsche Reform*. Berlin. 1. bis 3.1.1850. (=DR)

*Illustrierte Zeitung*. Leipzig. 4. und 11.1.1851. (=IZ)

*Morgenblatt für gebildete Leser*. Stuttgart/Tübingen. 1. bis 29.1.1851. (=ML)

*Neue Freiburger Zeitung*. Freiburg. 1. bis 8.1.1851. (=FZ)

*Wiener allgemeine Zeitung*. Wien. 1. bis 7.1.1851. (=WZ)

サンプルD

Büchner, Georg (2005 [1837]): Woyzeck. In: Ders.: *Woyzeck. Leonce und Lena*. Stuttgart. S. 5-38. (=WY. <https://www.projekt-gutenberg.org/buechner/woyzeck/woyzeck2001.html> [Stand: 26.3.2020])

Büchner, Georg (2005 [1836]): Leonce und Lena. In: Ders.: *Woyzeck. Leonce und Lena*. Stuttgart. S. 39-80. (=LL. <https://www.projekt-gutenberg.org/buechner/leonce/leonce.html> [Stand: 26.3.2020])

Freytag, Gustav (1966 [1854]): *Die Journalisten*. Göttingen. (=JR. <https://www.projekt-gutenberg.org/freytag/journal/journal.html> [Stand: 26.3.2020])

Grabbe, Christian Dietrich (2015 [1838]): *Die Hermannsschlacht*. North Charleston. (=HS. <http://www.zeno.org/Literatur/M/Grabbe,+Christian+Dietrich/Dramen/Die+Hermannsschlacht> [Stand: 26.3.2020])

Gutzkow, Karl (2013 [1844]): *Zopf und Schwert*. North Charleston. (=ZS. <https://www.projekt-gutenberg.org/gutzkow/zschwert/zschwert.html> [Stand: 26.3.2020])

Hebbel, Friedrich (2006 [1844]): *Maria Magdalena*. Stuttgart. (=MM. <https://www.projekt-gutenberg.org/hebbel/magdalen/magdalen.html> [Stand: 26.3.2020])

Ludwig, Otto (1979 [1850]): *Der Erbförster*. Stuttgart. (=EF. <https://www.projekt-gutenberg.org/ludwig/erbfstr/erbfstr.html> [Stand: 26.3.2020])

### 二次文献

- Becker, Karl Ferdinand (1852): *Schulgrammatik der deutschen Sprache*. 7. Aufl. Frankfurt a. M.
- Behr, Janina (2021): *Konstruktionen mit lassen. Gebrauch und grammatische Bedeutung im heutigen Deutsch*. Gottfried Wilhelm Leibniz Universität Hannover, Dissertation.
- Burger, Harald (2005): *Mediensprache*. 3. Aufl. Berlin/ New York.
- Cherubim, Dieter (1984): Sprachgeschichte im Zeichen der linguistischen Pragmatik. In: Hugo Steger/ Herbert Ernst Wiegand (Hg.): *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Sprachgeschichte*. Bd. 2. 1. Berlin/ New York. S. 802-815.
- Eggers, Hans (1977): *Deutsche Sprachgeschichte*. Bd. 4. Reinbek bei Hamburg.
- Eguchi, Yutaka (1997): Zu lassen-Konstruktionen im Zeitungsdeutsch. Bilanz einer computergestützten Korpusanalyse. In: Hokkaido Universität, *Language and culture* 32. S. 151-170.
- Engelsing, Rolf (1966): *Massenpublikum und Journalistentum im 19. Jahrhundert in Nordwestdeutschland*. Berlin.
- Enzinger, Stefan (2010): *Kausative und perzeptive Infinitivkonstruktionen. Syntaktische Variation und semantischer Aspekt*. Berlin.
- Gunkel, Lutz (2003): *Infinitheit, Passiv und Kausativkonstruktionen im Deutschen*. Tübingen.
- Heyse, Johann Christian August (1838): *Theoretisch-praktische deutsche Grammatik oder Lehrbuch der deutschen Sprache, nebst einer kurzen Geschichte derselben. Zunächst zum Gebrauch für Lehrer und zum Selbstunterricht*. Bd. 1. 5. Aufl. Hannover.
- Hildebrand, Rudolf (1930 [1867]): *Vom deutschen Sprachunterricht in der Schule und von deutscher Erziehung und Bildung überhaupt*. 19. verm. Aufl. Leipzig.
- Hosokawa, Hirofumi (2014): *Zeitungssprache und Mündlichkeit. Soziopragmatische Untersuchungen zur Sprache in Zeitungen um 1850*. Frankfurt a. M.
- Ide, Manshu (1996): *Lassen und läzen. Eine diachrone Typologie des kausativen Satzbaus*. Würzburg.
- Kilian, Jörg (2005): *Historische Dialogforschung. Eine Einführung*. Tübingen.
- Koch, Peter/ Oesterreicher, Wulf (1985): Sprache der Nähe - Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch* 36. S. 15-43.
- Koch, Peter/ Oesterreicher, Wulf (1994): Schriftlichkeit und Sprache. In: Hugo Steger/ Herbert Ernst Wiegand (Hg.): *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Schrift und Schriftlichkeit*. Berlin/ New York. S. 587-604.
- Koch, Peter/ Oesterreicher, Wulf (2007): Schriftlichkeit und kommunikative Distanz. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik* 35. S. 346-375.
- Koo, Myung-Chul (1997): *Kausativ und Passiv im Deutschen*. Frankfurt a. M.
- Mattheier, Klaus J. (1998): Kommunikationsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Überlegungen zum Forschungsstand und zu Perspektiven der Forschungsentwicklung. In: Dieter Cherubim u. a. (Hg.): *Sprache und bürgerliche Nation*. Berlin/ New York. S. 1-45.
- Polenz, Peter von (2000): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Bd. 1. 2. Aufl. Berlin/ New York.
- Schmidt, Wilhelm (1996): *Geschichte der deutschen Sprache*. 7. Aufl. Stuttgart.
- Schwitala, Johannes (2006): *Gesprochenes Deutsch*. 3. Aufl. Berlin.
- Straßner, Erich (1999): *Zeitung*. 2. Aufl. Tübingen.
- Zifonun, Gisela u. a. (1997a): *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 1. Berlin/ New York.
- Zifonun, Gisela u. a. (1997b): *Grammatik der deutschen Sprache*. Bd. 2. Berlin/ New York.
- 磯部美穂 (2002) 「lassen構文における不定詞の意味上の主語について—「lassen+認知動詞」の場合」大阪市立大学『セミナーリウム』24号, 73-84ページ。
- 井出万秀 (2013) 「構文の変遷 (2) 使役構文とその周辺」高田博行・新田春夫編『講座ドイツ言語学第2巻 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房, 91-115ページ。
- 高見健一 (2011) 『受身と使役 その意味規則を探る』開拓社。
- 細川裕史 (2013) 「大衆紙のドイツ語 (19世紀) 三月革命は書きことばを大衆に届けたのか?」高田博行・新田春夫編『講座ドイツ言語学第2巻 ドイツ語の歴史論』ひつじ書房, 249-273ページ。
- 細川裕史 (2020) 「古典派作家の言語」における無生物主語のlassen使役構文『阪南論集 人文・自然科学編』56巻1号, 33-44ページ。
- 湯浅英男 (2015a) 「人」主語のドイツ語lassen使役構文の用法—トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて—(その1) 神戸大学『国際文化学研究』44号, 1-27ページ。
- 湯浅英男 (2015b) 「人」主語のドイツ語lassen使役構

Mar. 2024

19世紀中期における無生物主語のlassen使役構文

文の用法—トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて—(その2) 神戸大学『国際文化学研究』45号, 89-116ページ。

湯浅英男 (2016) 「無生物主語のドイツ語lassen使役構文の用法—トーマス・マンの『ファウスト博士』の例文を用いて—」神戸大学『国際文化学研究』47号, 59-88ページ。

湯浅英男 (2018) 「言語研究における「分かりやすさ」と使用実態—ドイツ語lassen使役構文を手掛かりに—」神戸大学近代発行会『近代』118号, 1-25ページ。

(2023年11月17日掲載決定)